平成2年度厚生省心身障害研究
「新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究」

当センターにおける長期入院症例の検討

（分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅ケアシステムに関する研究）

研究協力者　山　田　多佳子

要　約：当センターNICUにおける6年間の長期入院症例について検討した。90日以上の長期入院は126例で入院総数の約7％を占めた。その理由は①未熟性103例（82％）、②先天異常19例（15％）、③その他4例（3％）であった。①群では95例（92％）が軽快退院しているのに対し、②群での軽快退院は5例（26％）のみであった。1990年1年間に入院となった先天異常児23例の転帰の検討から、入院児の約1％が治療不可能な障害をもったまま、自宅のに帰ることなく、NICU又は施設に長期間滞在しており、彼等のQuality of lite の向上に何が必要かについて考察した。

見出し語：長期入院, 未熟児, 先天異常

研究方法：1984年10月から1990年9月の6年間に当センターに入院となった新生児1861例中、1990年12月31日現在、90日以上の長期入院児126例を対象とし、原因、転帰について調査した。1990年1年間に入院となった先天異常児23例の転帰を調べ、退院不可能例について検討した。

結　果：90日以上の長期入院児は入院総数の約7％を占めた。そのうち180日以上の入院は24例で長期入院児の約20％であった。長期入院の理由は①未熟性に起因するもの103例（82％）、②先天異常19例（15％）、③その他（仮死、感染症etc）4例（3％）であった。①群では死亡1例、入院中3例、他科、他施設への転出4例を除く95例（92％）が軽快退院しているのに対し、②群では死亡7例、入院中3例、他施設への転出4例で、軽快退院は5例（26％）あった。同期間中に入院した超未熟児112例中、死亡20例と入院中3例を除く89例の出生体重別入院期間の平均値は、400g台240日、500g台207日、600g台145日、700g台143日、800g台134日、900g台123日出生体重が小さい程、入院期間は長くなるが、180日以上入院した超未熟児13例は、BPD、声門下狭窄、イレウス等、未熟性に加えて合併症を有していた。1990年1年間に入院となった先天異常は23例で、入院総数（286例）の8％を占めた。転帰は5例が新生児期に死亡、生存18例中6例（2％）が90日以上の長期入院であった。6例中2例が軽快退院、2例が転院、2例は現在入院中である。

考　察：未熟性に起因する長期入院児の90％以上が、ほぼ正常な乳児としてNICUから自宅へ帰

東京女子医大母子総合医療センター：
Tokyo Women's Medical College, Maternal & Perinatal Center

ることのできる希望的長期入院であるのに対し、先天異常のために長期入院となる児は、いずれも治療が困難又は不可能な症例であり、長い闘病生活後に37％が死亡（死亡時年令98日～1才6ケ月）軽快退院は26％のみで、38％は施設への転院又はNICUに入院中である。先天異常のために長期入院となる児が入院総数の2％を占めるとすれば、0.8％の児が治療不可能な障害をもったまま、NICU又は施設で人生を送っていることになる。出生前診断の進歩は、周産期センターにおける先天異常児の出生数を今後更に増加させると予想される。現在のNICUは、未熟児、病的新生児救命の為の集中治療を施行しているが、新生児期を生きぬき、さらに障害をもって生き続ける児たちに対して、発達を促す療育の場としての機能を果たしていない。高度の医療を生活の一部としながら、これらの児のもつ可能性を最大限に引き出し、Quality of Life を高めるために何が必要か。在宅での医療レベルを維持するための経済的援助及び、看護体制の充実、緊急時に対処できる中間施設のCapacityの増大等、多くのことを必要とするが、何よりもその基盤となるNormalizationの思想を理解することが大切であろう。NICUでのチーム医療が多くの新生児に生きるチャンスを与えたように、障害をもって生きる子供達に対しては、家族、医師、看護、福祉、教育等、より大きな輪が連携して、彼等の地域社会での生活を保障しなければならないと考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:当センターNICU における 6 年間の長期入院症例について検討した。90 日以上の長期入院は 126 例で入院総数の約 7%を占めた。その理由は①未熟性 103 例(82%)、②先天異常 19 例(15%)、③その他 4 例(3%)であった。①群では 95 例(92%)が軽快退院しているのに対し、②群での軽快退院は 5 例(26%)のみであった。1990 年 1 年間に入院となった先天異常児 23 例の転帰の検討から、入院児の約 1%が治療不可能な障害をもったまま、自宅のに帰ることなく、NICU 又は施設に長期間滞在しており、彼等の Quality of lite の向上に何が必要かについて考察した。